

〔翻訳〕

『ザストロツィーロマンス』(7)

パーシー・ビッシュ・シェリー 著
治村輝夫 訳

第十四章

夕方は澄みきっていた。羊の毛のような雲が水平線の上を漂っていた——満月が雲のない壮麗な姿で空高くにかかっていた。アドリア海の波が夕方のそよ風に穏やかに乱されてラグーナに群がっている無数のゴンドラにぶつかった時、それら一つ一つに月は銀色の輝きとなって反射した。

穏やかな風の翼に運ばれる美しいハーモニーがさまざまに変化するつぶやきとなって漂っていた。それは時には消えたかと思うと、次には心地よいうねりとなって再び高まりながら和らいで、耳を傾ける人に喜びを与えた。

その麗しい光景を見つめる目はどれも喜びに輝いていた。抑制されない楽しさにどの人の心も満たされていたが、ユリアの心はそうではなかった。彼女は喜びの感情に心を動かされることなく、自分以外の人の心を満たす楽しさにかき乱されることもなく、うつろなまなざしで変化に富んだ景色をじっと見つめていた。壮麗なゴンドラがストロバツォ女侯爵を乗せていた。周りで燃える無数のたいまつは、真昼の太陽にまさるとも劣らなかった。

思いに耽り、外のいっさいのものに気づかないで座っているのは、哀愁を帯びた、もの悲しいユリアであった。彼女をマチルダの鋭いまなざしが驚きと復讐の傲慢な表情で頭から足の先までじろじろ見た。その目に閃く敵意のある火は、恋敵にじっと注がれる時、心の感情を十二分に語っていた。それで、もしそれが伝説のバジリスクの力を持っていたなら、ユリアは即座に息絶えたであろう。

ヴェレツィの目を最初とらえたのは、今では忘れられたユリアのこの世のものとは思えない姿だった。一瞬彼はその均整の取れた姿を驚いて凝視し、マチルダにそれを指し示そうとしたその時、魅惑的なその女性のうつむき加減の顔に彼はとうの昔に失われたユリアを認めた。

ヴェレツィの感情を描くこと——じっと動かない姿勢からユリアが頭を上げて、以前は彼がうっとりとして見つめた顔を、彼が永遠の貞節を誓った人の心が表れた顔を彼の目に見せた時——は不可能だった。

それまで彼を麻痺させていた、いわば忘却の淵にいるような無感覚が、彼をマチルダに結びつけていた呪文が、溶けた。

たった一瞬前には有頂天になった想像の中を華やかに変化しながら漂っていた喜びの空中楼阁

がすべて消えてゆき、それに代わって、はかない官能のバラの花の中で後悔、恐怖、絶望的な悔恨が頭をもたげた。

彼はまだ魔法にかかったように見つめていたが、遠くではっきりしないユリアのゴンドラは、彼の張りつめた目の期待にそむいた。

しばらくの間、二人のどちらも喋らなかった。ゴンドラはすばやく前方に通りすぎた。しかし、考えに浸っているマチルダとヴェレッツィはその速さに気を留めなかった。

二人がサンマルコ広場に到着して、それを告げるゴンドリエの声が最初に沈黙を破った。

二人はびくっとした。——ヴェレッツィは今初めて恐怖の空想から目覚め、自分の前の光景が現実であること、またユリアに向かって何度も熱烈に口にした貞節の誓いが破られたことを悟った。

極度の恐怖が彼の頭を襲った——絶望の冷たい無感覚があらゆる感覚を凍らせ、彼の目は空をじっと見すえた。

「ああ！ 引き返しなさい——直ちに引き返しなさい！」ゴンドリエの問いかけいらだってマチルダが答えた。

ゴンドリエは驚いて彼女の命令に従い、彼らは引き返した。

広々とした運河にはゴンドラがひしめいていた。歓楽と壮麗さがあたりに満ちあふれていた。うっとりとするような調べがその場にいつしか聞こえてきた。しかし、音楽に気乗りせず、壮麗さにも注意を払わず、マチルダは座ったまま思考の迷路の中に迷い込んでいた。

この上なく激しい復讐が彼女の胸の内をざわつかせ、彼女は心の中で恐ろしい企てを決意した。

その間に、時刻が遅くなっていた。ゴンドラがマチルダの邸宅の前で止まった時、月是天頂に達していて、その光線をまっすぐに下の穏やかなアドリア海に注いでいた。

豪勢な夕食が二人の帰還に合わせて準備されていた。黙ってマチルダは中に入った——黙ってヴェレッツィが後に続いた。

物を言わずにマチルダは夕食のテーブルについた。ヴェレッツィはものうげな様子で、彼女のそばの椅子にどっかと腰を下ろした。

しばらく、どちらも口をきかなかった。

「今夜は元気がないですね」とうとうヴェレッツィが口ごもりながら言った。「何が気がかりなのですか」

「気がかりですって！」マチルダが繰り返した。「どうして気がかりなことがあると思うのですか？」

さらに激しい恐怖の発作が今ヴェレッツィの頭をとらえたようだった。彼は燃えるような額に片手を押し当てた——心の苦悶はあまりにも大きく、隠すことができなかった——ついさきごろ目にしたユリアの姿が彼の空想に浮かんた。そして、のしかかる抗しがたいほどの恐ろしい考えに圧倒されて、彼の感覚は機能しなくなった。彼はユリアの名前をおずおずと口にした——彼は前のめりに倒れ、ズキズキするこめかみをテーブルの上にもたれかからせた。

「起きなさい！ 起きなさい！ うちひしがれた、うそつきのヴェレッツィ、起きなさい」怒

り狂ったマチルダが陰うつな憎悪の声で叫んだ。

ヴェレツィとはとび上がり、驚いてマチルダの顔を見ると、それは激情に痙攣して、絶望と復讐が浮かんでいた。

「明らかです」マチルダが暗い声で憂うつに言った「明らかです、あの人は私を愛していません」

混乱した相せめぎ合う感情がヴェレツィの胸の中で戦った。彼の結婚の誓い——マチルダに誓った貞節——が言いようのない苦悶で彼の心をもたえさせた。

今もなお彼女は彼の心に非常に大きな支配力を持っていた——今もなお彼女の渋面は恐ろしかった——そして今もなお不運なヴェレツィは、彼女が絶望的な激情に逆上して彼に自分から永久に去りなさいと命じた時の声の調子に震えた。「それから」彼女は付け加えた「さあ、見捨てられたマチルダの隠れ家を敵に暴露しなさい。私を異端審問に引き渡しなさい。そうすれば、あなたが忌み嫌う女との結婚があなたをこれ以上束縛することはないでしょう」

息もつかない興奮に疲れ果ててマチルダは言葉を切った。彼女の心の中の激情が目にも光っていた。ヴェレツィの心の中ではおびただしい感情が葛藤していた。どうしたらよいのかおよわからなかった。しかし、その瞬間の衝動に負けてマチルダの足元に身を投げ出すと、低い声でうめいた。

ついに「私はいつもあなたのものです。いつまでもあなたのものです」という言葉が口からもれた。

しばらくマチルダは身動きせずに立っていた。とうとう彼女はヴェレツィを見た。彼女は彼の威厳のある、若々しい姿をじっと見下ろした。

彼女は魂が照らしだされた彼の顔を見つめた。すると、彼女の柔和になった心を何倍もの愛が襲った。彼女は彼の体を起こした——突然の愛情に興奮してこれまでのことを忘れ、彼女は胸に彼を抱きしめると、熱のこもったせかせかした口調で、あなたの愛は私のものですよと言った。

彼女の胸はこの上なく激しい感情で波うった。燃えるような唇を彼の唇に押し当てた。この上なく激しい、この上なく官能的な歓喜の気持ちが胸を騒がせた。

ヴェレツィにもそれがうつった。一瞬のうちに何もかも忘れ、別の人に誓った貞節の言葉の一つ一つが浮雲のように消え去った。忘却の淵にいるような麻痺が彼の感覚にゆっくりと広がっていった。彼はユリアを忘れた。いや、ただほんやりした幻影としてしか覚えていなかった。それは彼が永遠の貞節の誓いが与えられた魅力的で気心のあった女性というよりは、将来崇拜するかもしれない、空想の前に漂っている別世界の理想像であった。

幸福が戻ってきたことで有頂天になり、彼女は彼の抱擁から身をさっと振りほどいた——彼の手をつかんだ——その手を自分の唇に押し当てた時、彼女の顔一面がいっそう鮮やかな色を帯びた。

「では、あなたは私のものなのですか——永久に私のものなのですか？」有頂天になってマチルダが叫んだ。

「ああ！ 私はあなたのものです——永遠に」夢中になったヴェレツィが返答した。「どのような地上の権力も私たちを引き裂くことはないでしょう。魂の共鳴によって結ばれ、神ご自身が

証人となられた絆によって一つになったのですから」

彼は再び彼女を胸に抱きしめた——貞節の印として、再び彼女の燃えるように赤く染まった頬に熱烈な口づけをした。そして、その瞬間の激しい、抗しがたい感情に打ち負かされて、自分がここで厳かに繰り返し明言する結びつきを天であろうが地獄であろうが取り消すことはできない、と誓って言った。

ヴェレッツィはゴブレットをあふれんばかりに満たした。

「私を愛していますか？」マチルダが尋ねた。

「天の稲妻が私を焼き尽くしますように、もし私があなたを気も狂わんばかりに崇拜しなければ！ 私が果てしのない拷問に投げ入れられますように、神聖なマチルダ、もしあなたへの愛が永遠に続かなければ！」

マチルダの目がこの上なく熱狂的な勝利感で閃いた。歓喜した魂の喜ばしい感情はとても言葉で表せなかった——彼女は何も言わずに、ヴェレッツィの顔をじっと見つめ続けた。

第十五章

「自然の情から後悔の気持ちが
私の恐ろしい目的を揺り動かしたり、
私の意図の実行を妨げたりしないように。人殺しの手先たちよ、
この女の胸に来て甘い乳を苦い胆汁に変えておくれ、
どこにいても、おまえたちの姿は見せず、
自然の悪事に仕えている。」

『マクベス』

ヴェレッツィは満たしたばかりのゴブレットを持ち上げ、興奮した声で叫んだ——

「私の愛するマチルダ！ 汝の幸福に乾杯——汝のあらゆる願いに乾杯。そしてもし私が汝から逸れた思いを一つでも抱けば、かつて人の平安を損なった中で最も恐ろしい苦悶が私を直ちに破滅に追いやらんことを。天の神よ！ 私の誓いの証人となられ、それを決して消えることのない文字で書きたまえ！ 生きとし生けるものの幸福を見守る救いの精霊たちよ、聞け！ というのも、ここに私は永遠の貞節を、永久に不変の愛を、マチルダに誓うから！」

彼は言った——天に向けて目を上げた——マチルダをじっと見つめた。二人の目が合った——彼女の目は限らない愛を得た勝利の表情で輝いた。

ヴェレッツィはゴブレットを口元まで持ち上げた——その時、見よ！ 突然彼はそれを床に投げつけた——全身が恐ろしい痙攣で震えた——ギラギラと光る目は眼窩から飛び出さんばかりに、ぐるぐると激しく回った。突然の狂気に襲われ、彼は腰帯から剣を引き抜くと、恐ろしい意図を持ってそれを高くかかげた——

どのような幻影がヴェレッツィの眼球を害したのか！ どうして熱烈に愛する人がゴブレットを地面に投げつけたのか、自分の魂が選んだ人に対する永遠の愛の証としてそれを今まさに飲み

干そうとしていたのに！ また、一瞬前にはマチルダの腕の中を地上の楽園と思い描いていたのに、どうして彼は激怒して、不意に造り主の御前に急ごうとしたのか！——ヴェレツィの心に叱責の言葉を語りかけたのは、麗しい、しかし忘れられたユリアのやさしく輝く目であった——不実な者にとげとげしい言葉を浴びせたのは、乱れた巻き毛に隠れた彼女の神々しい顔であった。というのも、彼がゴブレットを口元に持ち上げた時——気も狂わんばかりの官能の火によって熱狂的な情熱の高みに達して不変の貞節を他の者に誓った時——ユリアが彼の前に立ったのだ！

狂気——この上なく激しい狂気——が彼の頭の中を騒々しく駆け抜けた。彼は短剣を高くかざしたが、ユリアが駆け寄り、はっきりとした口調で、驚きのこもったやさしい声で、ご自身の命を奪わないでください——私を助けてください——というのも、何もかもまだうまく納まるかもしれませんか、と懇願した。

「ああ！ だめだ、だめだ」ヴェレツィが狂ったように叫んだ。「私には墓の中より他に平安はありません。私は——私は——マチルダと結婚しているのです」

こう言うと、彼は激しく痙攣しながらソファに仰向けに倒れたが、彼の手はなおも致命的な短剣を握っていた。

マチルダはこの間、その光景をじっと見つめていた。彼女の胸にこの上なく激しい情熱が荒れ狂った——復讐、かなわない愛——幸福は永遠に自分のものだと思っただけの瞬間にかなわなくなった愛——が、彼女の胸を乱れに乱れた混乱の舞台に変えた。

それでも彼女は口をきかず——動かず——心を落ち着けて、思いがけなくも自分の歓喜の空中楼阁を消滅させてしまった出来事の結末をじっと立って待っていた。

絶望からしっかりと平静に戻ったユリアは、あくことのない心づかいでヴェレツィを回復せうるあらゆることを行った。ついに彼は意識を取り戻した。——彼はゆっくりと体を起こした。それから横たわっていたソファからぱっと立ち上がったが、目は激しくぐるぐる回り、全身はこの上なく激しい興奮で痙攣した。彼はまだ持っていた剣を上にあげると、歓喜の苦笑いを浮かべて、それを自分の胸に突き刺した！ 彼の魂はうめき声もあげずに飛び去り、体は真紅の血にまみれて床に倒れた。

幸福のあらゆる予感にとって致命的なこの打撃で狂ったようになり、立っている間、マチルダの精神の機能は激しい混乱の渦に巻き込まれた。彼女は自分がどこにいるのかほとんどわからなかった。

ついに不吉で、恐ろしい平静さが彼女の心一面に広がった。復讐が、この上なく恐ろしい復讐が、他のあらゆる感情を飲み込んだ。その目は悪鬼のような表情で光った。彼女はヴェレツィの生命のない死体の方に進んだ——その胸から剣を引き抜いた——それは彼の命の血が染みついていて、切っ先からばたばたと床へ滴り落ちた。彼女はそれを高くかざすと、万が一ユリアが復讐を切り抜けるなら自分を果てしない苦悶の運命に落としてくれ、と不遜にも自然の神に求めた。

彼女は意識を失って床に横たわっている生贄に向かって進んだ。乱暴に彼女を揺さぶると、乱れた髪の毛をつかんで床から起こした。

「私がわかる？」激情に逆上してマチルダが叫んだ——「傷ついたラウレンティーニがわかる？私の夫の血にまみれているこの剣をご覧ください——私から幸福を永遠に奪ってしまう行為を犯すように駆り立てられたあの青ざめた死体をご覧ください。その冷たい胸の中で今おまえの呪わしい姿が浮かれ騒いでいる」

マチルダの乱暴な行為にユリアの意識が呼び覚まされて戻った。理解していることを示すおどおどした表情で彼女が見上げると、怒り狂ったマチルダと高くかかげられて即死の危害を加えようとする血に染まった剣が見えた。

「死になさい！ 憎らしいやつ」激しい怒りを爆発させてマチルダは叫ぶと、短剣に恋敵の生き血を浴びせようと猛烈に試みた。しかし、ユリアがぱっと横に飛んだので、凶器はその首をわずかに傷つけ、血の流れがその石膏のように白い胸を染めた。

彼女は床に倒れたが、不意にとび上がると、血に飢えた迫害者から逃れようとした。

復讐を逃れようとする無駄な試みに新たに力づけられて、凶暴なマチルダはユリアのたなびく髪の毛をつかんで悪鬼のような力で彼女を引き戻し、おびただしい箇所を突き刺した。そして、勝ち誇った喜びを感じながら、命の名残がすべて失われた後になっても、何度も繰り返し剣を柄まで彼女の体に埋めた。

ついにマチルダの激情はそれ自体の激しさに消耗して弱まり、死のように静まった。彼女は剣を体から離れたところに勢いよく投げると、目の前の恐ろしい光景を不機嫌なまなざしでじっと見つめた。

彼女の前には死の腕に抱かれて、彼が横たわっていた。彼こそ自分の幸福の希望の確かな土台であるように思えたのに。

彼女の前には無数の刺し傷を受けて、恋敵が横たわっていた。その頭はヴェレッツィの胸にもたれ、天使のような顔には死んだ今もなお愛情のこもった満面の笑みが浮かんでいた。

そこに彼女自身がただ一人罪深いものとして立っていた。いっそう強い激情の発作が今彼女を襲った。言い表せないくらいの大きな恐怖の苦悶の中で、彼女は自分の髪の毛を一つかみ引き抜いた。——彼女は自分に命を与えた神を罵り、自分を生んだ母親に永遠の苦しみあれ、と呪った。

「それでは、このためだったのでしょうか」凶暴なマチルダがさらに言った——「恐怖のために、このような苦悶のために、修道士たちが慈悲深いと呼ぶお方は私を造られたのでしょうか？」

彼女は床にころがっている剣をつかんだ。

「ああ、友なる剣よ」悪鬼のような恐怖の声で彼女は叫んだ。「おまえの一撃がすべてを絶滅させてくれたらよいのに！ そうしたら、どんなに喜んで私はおまえを抱きしめることでしょう！」

彼女はそれを高くかざした——それをじっと見つめた——無垢のユリアのまだ温かい血が切っ先から滴り落ちた。

罪深いマチルダは死を思ってひるんだ——かかげられた剣が落ちていった——彼女の心はこの先に悪人を待ち受けている悲惨さをかいま見ていたので、宗教を軽蔑しているにもかかわらず——これまで無神論の原理に非常に固く依存していたにもかかわらず、彼女は将来のことを思って身震いした。そして内なる声が「おまえは決して死ぬことはないだろう！」とマチルダの魂に

呪いをささやいた。

このように彼女が絶望で一時的に精神が錯乱して我を忘れて立っている間に、夜がゆっくりと過ぎていき、彼女のお付きの召使がいつにない遅い時刻まで二人の食事が延びているのに驚いて、遅い時間であることを告げるためにやって来た。しかし、ドアを開けてマチルダの衣服が血に染まっているのに気がつくと、女は恐怖に後ずさりし、その部屋の恐怖の全貌を知らないまま、マチルダが刺されたと話して他の召使たちに危急を告げた。

ぞろぞろとみんなが戸口にやって来たが、ヴェレツィとユリアが死んで床に横たわっているのを見ると、恐怖にぎょっとして後ずさりした。

必死に勇気を奮い起こすと、マチルダは彼らに戻りなさいと大声で言った。しかし、恐れと恐怖が彼女の命令よりまさっていたので、狂ったように興奮して、みんなは部屋からあわてて出て行った。ただ一人残ったフェルディナンドがマチルダの方に進み、説明を求めた。

マチルダは言葉少なく、早口で説明した。

フェルディナンドは再び部屋を出ると、信じやすい召使たちに、見知らぬ女性がヴェレツィを驚かした、その女性がヴェレツィを突き刺してその後自殺した、と語った。

召使たちは、恐怖に無言のままフェルディナンドの話を聞いた時、その真実性に疑念を抱かなかった。何度も繰り返し、彼らはこの謎に満ちた出来事の説明を求め、その原因は何だろうかと頭をひねって推測した。しかし、推測すればするほど、戸惑うばかりだった。やがてついに、ピエトロという利口な男が（この男は、女主人がフェルディナンドをいっそう信頼しているという理由で彼を嫌っていたのだが）、この一件には耳にしたよりも多くのことが隠されていると思って、警察に通報した。それで朝になる前にマチルダの住居は十人会議に所属する役人の一行に取り囲まれた。

役人たちが中に入ろうとする時、大きな叫び声が空をつんざいた。マチルダは夜の間にそのように血なまぐさい悲劇が演じられた部屋にまだいた。恐怖に呆然となっている惨めな女が戸をたたく大きな音で目を覚ました時、口も気けない恐怖の中でまだソファに体を延ばしていた。

彼女は激しく動揺してソファからとび上がると、耳をこらした。再び物音がし、役人たちがどこかと入ってきた。

彼らはあらゆる部屋を搜索した。ついに彼らはマチルダが絶望で身動きせずに留まっている部屋に入った。

いかめしい役人たちでさえ、大胆で冷酷であるのに、殺されたユリアの美しい顔を見た時、一瞬ぎくっとして後ずさりした。死んで今なお美しかったが、その体はぞっとするような無数の傷で醜く損なわれていた。

「これは自殺ではあり得ない」偉ぶった態度から主任であるように思える一人がつぶやいた。彼がユリアのきゃしゃな体を床から持ち上げると、ほとんどまだ冷たくなっていない血がその衣服から滴り落ちた。

「命令を履行しろ」と彼はさらに言った。

二人の役人がマチルダの方に進んだ。うわべは落ち着いた様子で離れて立っていた彼女は、彼

らが近づくのを待った。

「私に何をお聞きになりたいのですか？」マチルダは高飛車に言った。

役人たちは答えなかった。彼らの主任は外衣からラウレンティーニ女伯爵の逮捕を命じる内容の書面を取り出すと、それを彼女に手渡した。

彼女は青ざめた。しかし、抵抗せずに執行令状に従い、黙って役人たちの後から運河までついて行った。そこにはゴンドラが待っていて、まもなく彼女は十人会議の薄暗い牢獄の中にいた。

わずかな藁が高慢なラウレンティーニのベッドだった。水差しの水とパンが食料だった。沈うつな気分、恐怖、絶望が心に広がっていた。彼女がつい昨日まで味わっていたあらゆる快樂が、夢中になった心が未来に描いた歓喜の幸福が、非現実な夢の幻影のように消え去った。また、じめじめとした狭い独房に閉じ込められていると、マチルダには未来の喜びのあらゆる希望がたちまち消え去り、屈辱のうちに終わるだろうということがわかった。

ゆっくりと時が過ぎた——ゆっくりとサンマルコの時計がけだるく過ぎ去りながら、巡りゆく時を打った。

夜がやって来て、真夜中の時がマチルダの心に自分の弔いの鐘のように響いた。

牢獄に通じる通路に物音が聞こえた。

マチルダは壁にもたれかけていた頭を上げ、未来の運命を決める出来事を待ち受けているかのように、懸命に聞き耳をたてた。入口の鎖の錠が外された時、彼女はまだ見つめていた。戸が開けられる時、蝶番が耳障りにきしむ音をたてた。二人の役人が入ってきた。

「後について来るように」恐怖におびえる彼女の耳に届いたのはこの簡潔な命令だった。

震えながらマチルダは立ち上がった。彼女の手足は監禁のためにこわばっていて、ほとんど体を支えることができなかった。しかし、必死に勇気呼び起こし、無慈悲な役人たちの後から黙ってついて行った。

そのうちの一人が明かりを持っていた。その光線はぼんやりとし柱の中を飛んで行き、光と影の強い対照によって、通路のひじょうな巨大さを見せた。

上方のゴシック風のフリーズは技巧をこらして作られていた。そしてさまざまな、グロテスクな形をしたコーベルはぞくちゅう簇柱のてっぺんから突き出していた。

彼らは戸口のところで立ち止まった。中から声が聞こえてきた。そのうつろな調子にマチルダの心は抑えがたいほどの身震いでいっぱいになった。しかし彼女はあらゆる不屈の意志を呼び出した。——裁判の間落ちていよう、そしてたとえ死の宣告を受けても自分の運命に勇気を持って立ち向かおう、と彼女は決意した。そうすれば、人々は見つめながらに叫ばないだろう——「かわいそうなラウレンティーニは死ぬ勇気がないのだ」

役人たちがそこで出会った別の者と話をしている間に、こういった思いが彼女の心をよぎった。

ついに彼らは話をやめた——さえぎられることのない静寂が満ちた。折り戸がさっと開かれると、広々とした、天井の高い部屋がマチルダの目に入った。中央にはテーブルがあり、その上にランプが中央からつり下げられてかかっていた。そこに黒いガウンを着た二人のいかめしい顔つきの男が座っていた。

二人の役人は彼らが座っているテーブルのところにマチルダを導くと、彼女をそこに残して部屋を出て行った。